

以前は、残業が多く、帰宅は深夜に及んでいました。会社はフレックスタイム制なので、本人が効率のいい仕事の仕方を取れるのです。この制度を活用して、育児の時間をつくり出しました。仕事の仕方に合わせて、育児時間を見つけたというわけです。

育児休暇のこと

宮本さんは、育児休暇については出産後、1年間休むことだと思込んでいました。会社では育児休暇を取ることを奨励していますが、実際には1年間も職場を離れるとなると、復帰した時に、仕事について行けなくなるのではないかといい怖れがあります。育児休暇は1年のうちなら、休業期間を自由にできることを知らなかったのです。

「育児休暇が1年間だと思っていたから、取るのは無理だと決めてしまっていました。1ヵ月位なら、取れない休暇ではありませ

がわかった時、子育ては子どもと親と一緒に過ごすやり方、環境にしようと話合いました。

妻に「でも、休みを3年もとったら、職場復帰に不安をおぼえるから、あなたも取ったら？」と言われて、『あ、そうか。おれも取れるんだ』と気づき、前向きに考えました。

職場の人間関係がよかったのと、年度の変わり目と出産がうまく重なったのもあり、育児休暇は取りやすかったと田澤さん。女性の同僚からは「英断ね」と励まされました。

育児休暇中の生活

「公園デビューができませんでした。でも、子どもを遊ばせたかったので、ちょっと離れた公園めぐりをしました。自分は一年という期限付きだからデビューできなくてもいいかなと思いましたが、主婦だったらそういうわけにもいかない。」と痛感、公園デビ

と。この子育てに、積極的に参加して、この時期にしかできない、この時だからできる父と子のふれあいを大切にしようと考えました。

育児休暇取得に向けて

そして、育児休暇を取る準備を始めました。33才の小笠原さんが育児休暇のときだけ、代替してくれる同世代の男の働き手は少ないものです。

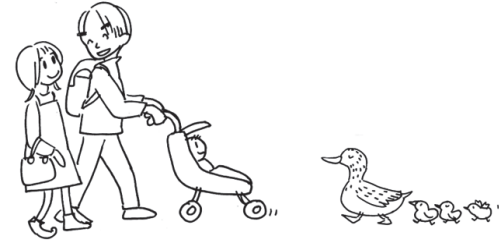
女性教師の産休制度が定着している学校という職場では、育児休暇に対しても、周囲の目は、民間企業などに比べて、温かいといってもいいでしょう。しかし、父親が育児休暇を取る例はまだ少ない現状です。

小笠原さんは自分の代替えの方を見つけるところから準備を始めました。「休みますから、後はよろしく」というわけにはいきません。男性の代替え職員を手配するのは会社でも苦労したようです。

ん。会社では、リフレッシュ休暇は、取らなければならない制度になっています。育児休暇も同じように、産後1年以内に、1ヵ月は取れる、取らなければならないとすれば普及するのではないのでしょうか」

二人で力を合わせて

奥さんは「主人の協力があるので助かっています。育児については、いろいろな悩みがありますがなんでも二人で相談して決めています。」相談できる人が身近にいてこそ、安心できる子育てなのでしょう。



ューできないお母さんの気持ちがわかりました。その代わり、保育園の一時預りや園庭開放を利用できて助かったと田澤さん。そしてなにより、1歳から2歳という、子どものかわいい盛りと一緒に過ごせたのが良かったということです。

育児を体験して変わったこと

協働の主夫として育児を実践し、教職に復帰した田澤さんは「以前はクラス全体の活気や勢いを重視していましたが、子ども1人1人の気持ちが大切という視点を持てるようになりました。子どもが不安な時に敏感になり、救ってあげたいという気持ちがより強くなりました」。

育児は夫が「手伝う」のではなく、一緒にやること。その体験が自分を大きく変え、その姿が少しずつ社会を変えていくのでしょう。

見つけた代替えの方は、休暇中も連絡を取りながら能力を発揮してくれ、安心して休むことができたということです。

周囲の理解と協力がなければ育児休暇は取りにくい。小笠原さんは、育児休暇を取ると決めてから、周囲の人たちに育児休暇を取ることをアピールしました。

「先例を作ることで、次の人も取りやすくなるし、まわりの人の協力が得られます。代替えの人への協力をお願いするためにも役立ったと思います。」育児休暇を取りやすくするためには、周囲への根回しは欠かせないことでしょう。

取りやすい環境づくりは、本人が率先して、まわりへ働きかけることがポイントのようです。

